

ＪＡあきた白神青年部（熊谷孝部長）による多収穫競争会が9月8日に行われ、26年産の出来について確認しました。管内の青年部員は依頼を受けた圃場を訪れ、1坪分の稲を刈り取って計測。今年の予想収量や刈り取りの適期などを調査しました。全21カ所の坪刈りを行った結果、10a当たりの最高収量は668.5kgで、平均収量は579.5kgとなりました。春先は日照時間に恵まれたが、4月下旬頃から的高温多照などで生育への影響が心配されましたが、1穂当たりの粒数は少ないものの、穂数が多く確保されており、作柄は平年並みとなりました。



坪刈りを行い収量や刈り取り適期を確認
青年部多収穫競争会を実施

青年部多収穫競争会を実施



▲たわわに実った稲穂を脱穀する青年部員

早い手続きで作業の効率化を後押し 産地の強化を目指しカントリーエレベーターの荷受けがスタート



▲生産者の大切な粒を最新の機械によって保管

組合員の労力軽減と安定的な管内農業の実現、均質米による有利販売・産地強化などを目的に、カントリーエレベーターが9月20日から平成26年産米の荷受けをスタートしました。9月下旬から10月上旬には稲刈りがピークを迎え、多くの農家がカントリーエレベーターに粒を搬入したほか、各地区の中継基地からも次々と粒が搬入され、最新機械によって乾燥調製された後、サイロに保管されていきました。カントリーエレベーターと各中継地点での搬入は10月20日で終了し、その後大豆の荷受けを行う予定となっています。



平成26年産米の初検査が9月22日からＪＡの各倉庫にて行われ、品位鑑定資格を持った職員たちが、新米の出来を確認しました。今年からは天候不順による生育の影響も少なく、出芽から出穂まで順調に推移しました。7月に入ってから気温の日較差も平年より大きかったため茎数も増加し、それによる穂数も多くなりました。9月末時点での一等米比率は97.1%、58.632俵となりました。担当者は「青い未熟粒が散見されるがまずまずの作柄。一等米比率や整粒歩合も高く、品質の水準は申し分ない。今後の集荷ピークも、この水準を維持して欲しい。」と話していました。



各倉庫に農家自慢の米が集う 稲刈りが始まり新米の品質検査がスタート



▲粒の大きさや水分量、着色粒などを検査する担当者